



母と子の時間

【岐阜県】辻川尚子 40歳

「この子に何もしてあげられない、ただ見てるだけ」と両手に納まるほどの小さな子どもを見つめ母親はつぶやいた。母親が分娩後初めて目にした我が子は、呼吸器や点滴につながれ保育器の中にいた。子どもに触れることもできない母親は、保育器の中にいる我が子をただ見つめているだけだった。周りの母親は子どもを抱きしめ「かわいい。かわいい」とはしゃいでいる。母親なのに何もしてあげることができないと、悲痛な訴えだった。思い描いていたリースプランとはかけ離れた現実、母親は愕然としていた。

母親としての喜びを実感してもらうために私は何ができるのか？ 母と子のつながりを実感してもらうために出した答えは、「綿棒に湿らせた母乳をあげてみませんか？」だった。主治医からの許可がおりその旨を母親に告げると、びっくりした顔で私の顔を見た。母親が子どもにしてあげる初めての育児だった。「母乳をあげることができるとすね」。母親の顔が輝いて見えた。

抱かれこの世を去って逝った。たった数日しか生きることができなかつた子どもと、たった数日しかその子の母親でいることができなかつた母親の、親子としての時間をつくることができた。

初めて母乳をあげる日、母親は恐る恐る綿棒を子どもの口に近付けた。「あっ！ 吸ってる吸ってる。美味しい？」と子どもにも声を掛ける母親がいた。いつも悲しそうに保育器の中を見つめていた母親は、我が子が母乳を吸った瞬間に一気に顔がほころび嬉しさをにじませた。

数日後、子どもは、母親の胸に

